第8回 チェビシェフの不等式,確率変数の変換(5.4-5.5)

村澤 康友

2025年10月21日

今日のポイント

1.	マルコフ/チェビシェフの不等式は、	分布
	の裾の確率の上限を与える	

- 2. Y := g(X) の分布は、X が離散なら pmf、連続なら cdf で導出する.
- 3. [0,1] 上の一様乱数 U を $F^{-1}(U)$ と変換した乱数の cdf は F(.) (逆関数法).

目次

1	チェビシェフの不等式	1
1.1	分布の裾の確率	1
1.2	マルコフの不等式	1
1.3	チェビシェフの不等式(p. 104)	1
2	確率変数の変換	2
2.1	離散分布	2
2.2	連続分布(p. 106)	3
2.3	乱数の生成(p. 106)	3
3	今日のキーワード	4
4	次回までの準備	4
	は、 コの子体士	

1 チェビシェフの不等式

1.1 分布の裾の確率

確率変数 X の分布の裾の確率を求めたい (図 1).

- 分布が既知なら cdf・pmf・pdf から $\Pr[|X| \ge c]$ が正確に求まる.
- 分布が未知でも積率から $\Pr[|X| \ge c]$ の上限が求まる.

1.2 マルコフの不等式

補題 1 (マルコフの不等式). 任意の c>0 について

$$\Pr[|X| \geq c] \leq \frac{\mathrm{E}(|X|)}{c}$$

証明. X が連続なら

$$c \Pr[|X| \ge c] = c \int_{|x| \ge c} f_X(x) \, \mathrm{d}x$$

$$= \int_{|x| \ge c} c f_X(x) \, \mathrm{d}x$$

$$\le \int_{|x| \ge c} |x| f_X(x) \, \mathrm{d}x$$

$$\le \int_{-\infty}^{\infty} |x| f_X(x) \, \mathrm{d}x$$

$$= \mathrm{E}(|X|)$$

離散の場合も同様.

注 1. X の分布にかかわらず $\Pr[|X| \ge c]$ の上限を与える.

1.3 チェビシェフの不等式 (p. 104)

定理 1 (チェビシェフの不等式). 任意の c>0 について

$$\Pr[|X - \mu_X| \ge c] \le \frac{\sigma_X^2}{c^2}$$

証明. マルコフの不等式より

$$\Pr[|X - \mu_X| \ge c] = \Pr[|X - \mu_X|^2 \ge c^2]$$

$$\le \frac{\operatorname{E}(|X - \mu_X|^2)}{c^2}$$

$$= \frac{\operatorname{var}(X)}{c^2}$$

注 2.cが大きいときマルコフの不等式よりシャープな上限を与える。また大数の法則(第 8 章)の証明に用いる。

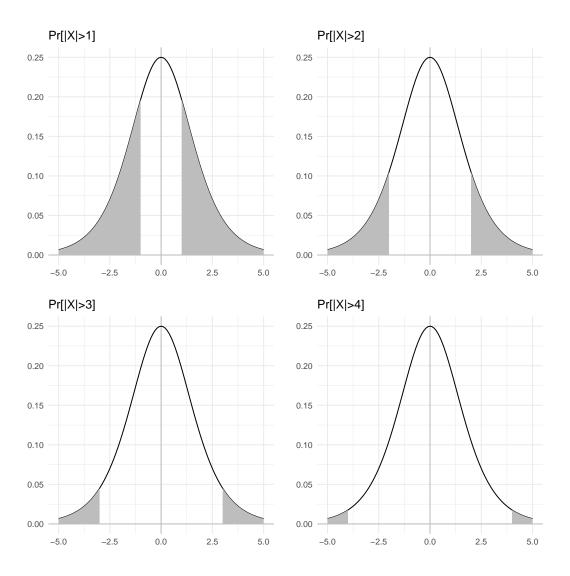


図1 分布の裾の確率

例 1. 標準化変量を Z とすると偏差値は 10Z+50. 例えば

- |Z| ≥ 2 ⇔ 偏差値 30 以下か 70 以上
- |Z| ≥ 3 ← 偏差値 20 以下か 80 以上

チェビシェフの不等式より

$$\Pr[|Z| \ge 2] \le \frac{1}{4}$$

$$\Pr[|Z| \ge 3] \le \frac{1}{9}$$

2 確率変数の変換

2.1 離散分布

X を離散確率変数,g(.) を 1 対 1 の関数とする. Y:=g(X) の分布を求めたい.Y の pmf は

$$p_Y(y) := \Pr[Y = y]$$

$$= \Pr[g(X) = y]$$

$$= \Pr[X = g^{-1}(y)]$$

$$= p_X (g^{-1}(y))$$

例 2. 次の確率変数を考える.

$$X := \begin{cases} 1 & \text{with pr. } 1/2 \\ 0 & \text{with pr. } 1/2 \end{cases}$$

Xの pmf は

$$p_X(x) = \begin{cases} 1/2 & \text{for } x = 0, 1\\ 0 & \text{for } x \neq 0, 1 \end{cases}$$

$$Y = \begin{cases} 2 & \text{with pr. } 1/2\\ 0 & \text{with pr. } 1/2 \end{cases}$$

Yの pmf は

$$\begin{aligned} p_Y(y) &:= \Pr[Y = y] \\ &= \Pr[2X = y] \\ &= \Pr\left[X = \frac{y}{2}\right] \\ &= p_X\left(\frac{y}{2}\right) \\ &= \begin{cases} 1/2 & \text{for } y = 0, 2\\ 0 & \text{for } y \neq 0, 2 \end{cases} \end{aligned}$$

X,Y の pmf のグラフは図 2 の通り

2.2 連続分布 (p. 106)

X を連続確率変数,g(.) を 1 対 1 の関数とする.また g(.), $F_X(.)$ は微分可能とする.Y:=g(X) の分布を求めたい.連続確率変数の変換では,まず cdf を変換し,それから pdf を求める.

1. g(.) が厳密な増加関数なら、Y の cdf は

$$F_Y(y) := \Pr[Y \le y]$$

$$= \Pr[g(X) \le y]$$

$$= \Pr[X \le g^{-1}(y)]$$

$$= F_X(g^{-1}(y))$$

pdfは

$$f_Y(y) = F'_Y(y)$$

= $Dg^{-1}(y)f_X(g^{-1}(y))$

2. g(.) が厳密な減少関数なら、Y の cdf は

$$F_Y(y) := \Pr[Y \le y]$$

$$= \Pr[g(X) \le y]$$

$$= \Pr[X \ge g^{-1}(y)]$$

$$= 1 - F_X(g^{-1}(y))$$

pdfは

$$f_Y(y) = F'_Y(y)$$

= $-Dg^{-1}(y)f_X(g^{-1}(y))$

まとめると

$$f_Y(y) = |Dg^{-1}(y)| f_X(g^{-1}(y))$$

 $|Dg^{-1}(y)|$ を**変換のヤコビアン**という. これがない と $f_Y(.)$ を全範囲で積分しても 1 にならない.

例 3. X を [0,1] 上の一様確率変数とする. X の pdf は

$$f_X(x) = \begin{cases} 1 & \text{for } x \in [0, 1] \\ 0 & \text{for } x \notin [0, 1] \end{cases}$$

$$F_Y(y) := \Pr[Y \le y]$$

$$= \Pr[2X \le y]$$

$$= \Pr\left[X \le \frac{y}{2}\right]$$

$$= F_X\left(\frac{y}{2}\right)$$

$$f_Y(y) = F'_Y(y)$$

$$= \frac{1}{2}f_X\left(\frac{y}{2}\right)$$

$$= \begin{cases} 1/2 & \text{for } y \in [0, 2] \\ 0 & \text{for } y \notin [0, 2] \end{cases}$$

X, Y の cdf と pdf のグラフは図 3 の通り.

2.3 乱数の生成 (p. 106)

確率分布 (cdf) F(.) からの乱数を生成したい. 一様乱数はコンピューターで生成できる.U を [0,1] 上の一様確率変数とする.U の cdf は

$$F_U(u) := \begin{cases} 0 & \text{for } u < 0 \\ u & \text{for } 0 \le u \le 1 \\ 1 & \text{for } u > 1 \end{cases}$$

定理 2. $X := F^{-1}(U)$ の cdf は F(.).

証明. F(.) は増加関数なので

$$F_X(x) := \Pr[X \le x]$$

$$= \Pr[F^{-1}(U) \le x]$$

$$= \Pr[U \le F(x)]$$

$$= F_U(F(x))$$

$$= F(x)$$

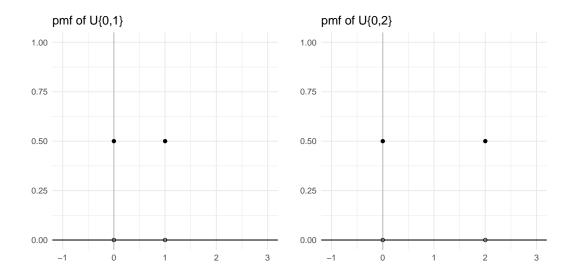


図 2 離散確率変数の変換

定義 1. 一様乱数 U を $F^{-1}(U)$ と変換して F(.) からの乱数を生成する方法を**逆関数法**という.

例 4. x > 0 について

$$F(x) := 1 - e^{-x}$$

とすれば F(.) は cdf (指数分布). F(.) の逆関数は

$$F^{-1}(y) = -\ln(1-y)$$

したがって U が一様乱数なら $-\ln(1-U)$ は指数 分布にしたがう.

3 今日のキーワード

マルコフの不等式, チェビシェフの不等式, 確率 変数の変換 (離散・連続), 変換のヤコビアン, 逆関 数法

4 次回までの準備

提出 宿題 2, 復習テスト 1-8

復習 教科書第5章4-5節,復習テスト8

試験 (1) 教科書を読む (2) 用語の定義を覚える (3) 復習テストを自力で解く (4) 過去問に挑戦

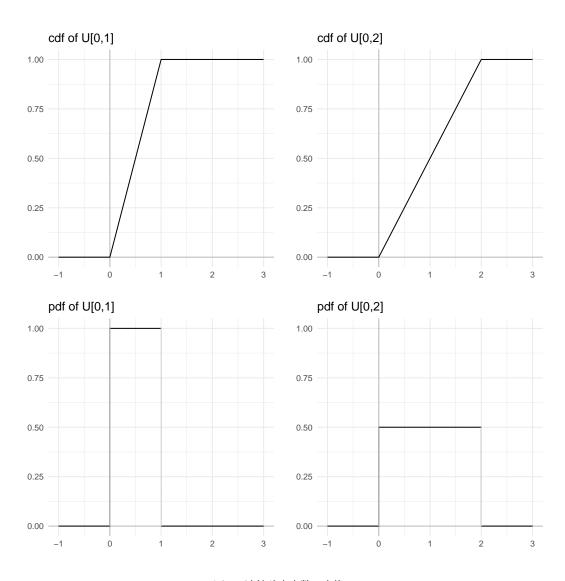


図3 連続確率変数の変換